当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。無断引用や転載をお断りいたします。
Copyrighted materials of the authors. Works in progress: Please do not circulate
or cite without permission.

アジア太平洋地域における希望の人類学的研究：新たな身体実践が拓く未来

第 5 回研究会（2025 年 7 月 19 日開催）報告

日時：2025 年 7 月 19 日（土曜）13 時～18 時
場所：東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所　4 階 405 コモンズラボ

内容：冒頭で代表者の深川が、研究グループの活動状況と今後の研究会計画について、報告をおこなった。その次に、小西による能登の「復興」、フィールドワークの「出会い」性、チベットと日本の「縁」としての希望をテーマとする研究報告と、中村による希望の限界、カナダ・イヌイットの自殺をめぐる生政治、そこから逃れる別の生と時間性に属することそれ自体としての希望をテーマとする研究報告が行われた。各報告の後に、参加者全員との質疑応答と全体討論をおこなった。仏教的・日本的な「縁」概念と能登の半ば受動的な「復興」という特異な希望を論じた小西の研究発表と、希望の限界に位置する絶望的な生政治下のイヌイットの自殺願望と死後の生／生なる死が識別不可能な時空としての希望へ考察を深めていく中村の研究発表は、個別報告に留まらず、「希望の人類学」研究会にとって、これまで考えることができなかったオルタナティヴな希望の形態を明らかにするものであった。両者の発表をめぐる全体討論を通じて、メンバー全員でこれからより多様な「希望の人類学」を構築すると共に、それらを総合していく基盤の一つを確立できた。各報告の概要は、下記の要旨の通りである。

（以上文責　深川宏樹）

報告１：
縁と希望の人類学へ―フィールドにおける「復興」をめぐって

小西 賢吾（京都大学）

本発表では、2024 年に能登半島を襲った災害を主な事例として、「復興」が含意する生きる力や未来指向のベクトルと、その背景にあるつながりの生成を「あいだがら」と「めぐり

あわせ」あるいは必然と偶然のダイナミズムとしての「縁」概念から読み解き、縁と希望の人類学の可能性について検討した。導入として、能登の被災地に見られる「傾いたまま停止している」風景や、剥き出しの大地に戻った千枚田を取り上げ、停止した状態が動き出す兆候と希望との関係について論じた。次に能登をはじめとして現代日本における社会的不安の通奏低音になっている人口減少について、その背景をふまえて「わたしたちの（関係性を前提とする）生がこのままでは維持できなくなるのではないか」という不安と位置づけるとともに、関係性こそが地域社会を支えるという先行研究の主張について検討した。とくに、地方創生の文脈において注目される「関係人口」を「縁の構築」の問題として考えるための整理を行った。

次に、アジア仏教圏において共有される「つながり」や「関係性」を指す概念としての縁について、地縁や血縁をはじめとする「あいだがら」としての関係性を記述するための概念（縁①）と、「ご縁がありますね」という表現に端的に見られるような「めぐりあわせ」としての出会いとそこから生まれる関係性を記述するための概念（縁②）という両側面を指摘した。そして両者のダイナミズムを、行為主体が停止ないし開かれ、再び固定され析出するプロセスとしてとらえ、そこに未来へ向かう力のベクトルを見いだすことで、縁を希望の人類学と対話させることを試みた。

以上をふまえ、発表者がこれまで関わってきたチベットの宗教復興に関する研究にもふれながら、「復興」を災害研究にとどまらず、関係性を再構築し、「前を向く」個人の協働による力の発露としてとらえる視点を提示した。そして能登における民族誌的事例を検討し、そこに見いだしうる希望を、停止と駆動、偶然と必然が織りなす過程として論じた。本発表では、宮崎広和によって提示された「関係性に希望がある」というテーゼと対話しながら、関係性の縮減としての人口減少や切断としての災害を論じるとともに、縁の構築としての「めぐりあわせ」が「あいだがら」を生み出していくプロセス、停止と駆動のダイナミズムを希望の人類学の議論に定位することを目指した。

質疑応答では、本発表で提示された希望を「受動的希望」と位置づけて西洋的な希望の概念と対話させる可能性や、希望の持続性の問題、さらに瞬間的な力の発露と長期的な復興プロセスとの関わりについて議論が行われた。また、偶然としての縁を必然に転化させる際の「気づき」について、縁と主体性の関わりから検討した。また異文化のフィールドワークを踏まえて自文化の記述を行う意義をめぐる議論からも大きな示唆が得られた。

報告 2

「別の時間」を生きることへの憧れ（longing）—(動けなさ)のなかの希望についての一考察

中村 沙絵（東京大学）

本発表は、深川が第 1 回の発表で提起した「希望の不可能性を十二分に踏まえて、そこからかろうじて掬い上げられた希望の可能性の縁を、そのギリギリのラインで垣間見せる「希

望の民族誌」」の一つの形を、Lisa Stevenson の著作『Life Beside Itself: Imagining Care in the Canadian Arctic』（2014）を取り上げつつ、その民族誌的記述の精読から浮かび上がらせることを目指した。その際、（１）希望という主題を行為主体性の問題系から時間性の問題系へと置き換えた宮崎（そして、ブロッホ、ベンヤミン）の議論にならい、**直線的な時間が断ち切られ、時間≒クロック・タイムの意味が宙づりになる瞬間**に焦点をあてること、および（２）希望を「自律的な選択」や「認識された目標」としてではなく、**身体の沈黙や膠着が破られるような瞬間**に立ちあがるものとしてみてみる、という二つの観点を提案した。

取り上げた民族誌、『Life Beside…』の舞台は、1950 年代の結核流行から現代の若者の自殺流行にいたるまで、カナダ政府より医療・福祉的な統治を受けてきたカナダ極北圏・ヌナヴト準州である。著者によれば、この地に暮らす若者たちの多くが、自分や身近な者の生死が統計上の「数値」として把握されているにすぎないことを鋭敏に感じ取っていた。このことは、植民地化以降、イヌイトの人々が社会問題の当事者や管理の対象として処遇され続けてきたことの歴史的帰結と密接に関係しているのだという。

発表では、本書の第 5 章を、主に民族誌の流れに沿って事例を紹介した。まず、身近な者を感染症や自殺や事故などで亡くし、自分もいつ自殺するかわからない、しかし日常生活は「ただ生きていること」に至上の価値をおく制度に囲まれている――こうした状況のなかでしばしば「動けなく」なってしまう若者と、その傍で彼らに「未来を欲してほしい」と望む著者のあいだに生まれる「希望」にふれた。その後、イヌイットの人々にとって特別な意味をもつキャンプの活動において、別の時代を生きることと同時に、別様の時間に生きることへの longing＝憬れの憬れを意味する *kajjarniq* という概念を紹介した。最後に、「動けなさ」のなかにいたある友人が、自殺をめぐる夢を語るなかで、死者と生者とが再び出会うことができるような、不可思議な時間性を生きていること、その中で著者に直観的に把握された力や動きについてふれた。

質疑応答を通して、本質的な問題に気付くことができた。それは、著者が若者たちのあいだに抱いた「動いてほしい＝生きてほしい」という切なる願いと、目的もなく車で町を旋回したり、キャンプで「永遠に迷子になりたい」といったり、夢の中で自殺した友人と一服したことを滔々と語る若者たちの姿が示唆するある種の希望のようなものは、やはり別様のものであるということである。「動くこと」を軸に希望を考察してしまえば、本書が表現していると考えられる「希望の不可能性からかろうじて掬い上げられるような、希望の可能性の縁」をとらえることはできない。「動けなくされていること」と「動かないこと」を区別すること、「厚み」のある時間を生きるという感覚の一つの様態として本書の若者たちの生き様に接近することなどが、改めて課題として析出された。